

〔巻頭言〕

豚コレラ撲滅計画とSPF養豚経営者の役割

SPF豚研究会長 柏崎 守

現在、豚コレラ撲滅計画が進行中です。こうした計画の実行はわが国の防疫史上はじめての試みであり、単に豚コレラの撲滅というだけでなく、養豚衛生レベルの向上にも大きく貢献し、莫大な利益を生む国家的なプロジェクトであります。その成否は、養豚界のリーダーシップの発揮と生産者自らのやる気と実践にかかっていることを改めて肝に銘じる必要があります。

豚コレラは「豚のいるところ豚コレラあり」と言われるほどですが、先進的な豚生産国では20~30年も前にすでにその撲滅に成功しています。しかし病気が勝手に自然消滅したわけではなく、綿密な撲滅計画のもとに官民一体となった永年に及ぶ努力の結果なわけです。しかも国中で発生が相次いでいる最中での撲滅計画のスタートであり、いかにリスクなプロジェクトであったかが想像されます。目前の敵に全力で立ち向かった生産者と防疫関係者の勇気には頭がさがる思いがします。

それに比べて、わが国で今実行しつつある豚コレラ撲滅計画に対するリスクはかなり低いといえます。その理由として、現行ワクチンは当時欧米で使用されていたものより効果的であり、計画的な予防接種の実施により発生は皆無の状況にあること、飼養戸数は約16,000戸と少ないうえに大規模経営が主体で、こうした計画に対する団結と協力が得やすいこと、診断技術は迅速化・高精度化して類症鑑別も容易にできる状況であることなどがあげられます。しかしこうした状況がかえって緊迫感を欠く原因になっているのも事実です。

わが国の養豚技術は世界の先端レベルにあると言われますが、豚コレラ撲滅に関しては欧米の豚生産国に比べて大幅に出遅れてしまいました。国際競争力の面から生産コストの一層の縮減が要請されている一方で、豚コレラの発生防止に毎年40数億円もの資金が注ぎ込まれている現状にあるのです。こうした理不尽な状況から一刻も早く脱するためにも、どうしても早期撲滅を図らなければならぬ病気です。

しかし豚コレラ撲滅計画の進行途中で、撲滅国がかつて経験したような複雑で困難な問題に遭遇する可能性があります。こうした問題の発生を最小限に押さえ、かつ計画が今世紀中に終了できるためには、ワクチンの全頭接種とか、疑わしい病気の病性鑑定の実施などといったごく基本的なことを確実に実行することです。生産者がこうした防疫の基本を実行できないようでは、撲滅どころか経営の存続すら危ういものとなってしまいます。

今さらいうまでもありませんが、SPF養豚経営の理念は豚集団の健康状態を高水準に維持することにより、効率的でしかも高品質・安全な豚肉を生産するシステムの構築にあります。この理念は広く一般市民からも支持されていますが、豚コレラ撲滅計画もこの理念に沿うものであり、その成功を願わずにはられません。豚コレラの重圧からの解放という恩恵に預かるのはSPF豚生産者自身であることを理解し、この面でも一致団結して撲滅計画に協力するとともに、リーダーシップをとるよう切にお願い申し上げます。